

## I 第1分科会のまとめ

### 1 第1分科会の研究経過

研究の実質的なスタートは19年度からであった。同様の研究主題を掲げ、研究の主旨や研究方法、研究の進め方について全教員の共通理解を図るための研修を行った。研究開始に向けての準備期間として年間6スパンの指導計画を各教科で検討し1スパンではあるが指導計画試案を作成した。そしてそのスパン内で各自が検証授業を試みた。また多様な授業形態の中での個に応じた指導方法の工夫とはどのようなものなのかを、研修会や研究授業を通して研修した。20年度から本格的に研究が始まり、PISA調査で明らかになった子どもたちの学力についての問題点、課題について理解を深め、言語活動の重要性や読解力の解釈についても研修を重ねた。これらを受け、新学習指導要領の改訂点も見据え、各教科の研究主題を設定した上で検証授業を行ってきた。

第1分科会の取り組み内容は紀要5ページの研究方法の(1)①②③④を担当するものである。分科会の構成は各教科主任であるが、研究方法の内容からして実質的には、全教員が関わってくるものである。年間指導計画は6スパンで区切り基礎コースと標準・発展コースの2種類を作成した。さらに研究主題である、読解力、思考力、判断力、表現力の育成と各スパンでの指導単元との関連を明確に位置付けた。研究授業はもとより、普段の公開授業や授業観察などで略式指導案を作成する際も研究主題との関連を位置付けることを行い、日常の授業の中で各自が絶えず研究主題を意識するようにした。

以下紀要5ページに示された第1分科会の取り組み内容①～⑥について記す。

### 2 第1分科会の取り組み内容

#### (1) 個に応じた授業改善→少人数授業・習熟度別授業の研究実践(国、数、英、社)

国語科、社会科では少人数授業を実施した。クラスの人数を単純に2分割し、国語では単元別(文法と物語文、書写と古典など)に、1・2年の社会科では地理と歴史に分け授業を行った。英語科、数学科では習熟度別授業を行った。各スパンの区切りでクラス編制を組み替えたり、内容によっては一斉授業、TT授業も取り入れながら実践した。

#### (2) 一斉授業の中での、個に応じた指導方法の研究実践(加配措置のない教科)

理科、音楽、美術、保健体育、技術家庭科では一斉授業の中でどのように基礎コースと標準発展コース向けの指導を展開するかということに取り組んだ。本校の一クラスの生徒数は1・2年生が37人前後、3年生が31人前後である。実技教科は本来、個に応じた指導が主であるが基礎と標準・発展という大きな2つの分類で生徒をとらえ、それぞれのグループに見合った達成目標、評価基準を設定するなどして授業に臨んだ。

#### (3) PDCAサイクルを踏まえた、年間6スパンの指導計画の作成

年間を6スパンに区切ることで順調に指導計画が軌道に乗るようにした。

- ・ P (PLAN 計画) 年間指導計画を立てる。
- ・ D (DO 実行) 指導計画をもとに指導を実行する。
- ・ C (CHECK 状況の把握) スパンの区切りの中間・期末・学年末テスト等の結果から状況を分析する。
- ・ A (ACTION 調整・改善) 生徒、保護者との教育相談や指導計画の修正を行う。

実技教科などでは必ずしもこのサイクル、6スパンに当てはまらない状況もあるため、大きな目安としてとらえ、教材や単元の工夫を行った。

#### (4) ALT, AT, TT導入での指導方法の研究実践（英語科導入、社会科は20年度までTTを実践）

英語科では、ALTとは毎週全学年・全学級で1度は授業を行っている。形態は3年生では一斉授業、1・2年生では少人数授業で行っている。文法事項に関するペアワーク・グループワーク・プレゼンテーションなどをALTとともに工夫しながら授業を展開している。それにより生徒のコミュニケーション能力・意欲、また表現力の育成を目指した。

社会科では、平成20年度までTTによる授業を行った。一人が主な授業を行い、もう一人が基礎コースに該当する生徒のサポートを行った。また、主授業者を単元により交代して授業を行い、分かりやすい授業を心がけた。

#### (5) 情報機器の活用や電子黒板の活用、ワークシートなどの教材教具の工夫、テスト問題の工夫など

中央区では各校に1台、電子黒板が配置されている。使い方に関する研修は全教員が区の情報研修などで受講している。21年度は理科で積極的に電子黒板を活用した授業を行い理科部会での研究授業も行った。また生徒各自がインターネットなどを利用し調べ学習を行い、パワーポイントで編集し発表するなどの授業実践も行った。国語・保健体育では言語活動の際に、視聴覚機器を利用し記録を撮ることで効果的な指導に役立てている。他教科でも基礎・基本の定着を図るためや、適正な評価を行うためにワークシートなどの教材・教具の工夫を行った。また研究主題にのっとり、表現力・判断力・読解力・思考力の育成を目指した指導の結果が適正に評価に反映されるように、各教科の観点別評価項目との関連を明確にし、テスト問題の設問に生かされるように工夫した。

#### (6) 指導技術・授業力の向上

研究授業を通して他教科での研究主題への取り組みを互いに理解した。さまざまな形態や内容の授業を見ることで生徒の状況を多角的に観察し、自己の授業の参考とし指導の工夫、向上に役立てた。

### 3 各教科より挙げられた研究のメリット・デメリット

#### (1) メリット

- ① 意欲を高める言語活動の授業を工夫することで生徒の基礎・基本となる学力は向上した。
- ② 教科の教員同志が互いに指導形態や指導方法、教材やワークシートなどに関して、意見交換を活発に行うようになった。
- ③ 生徒が意欲的に学習に取り組む工夫をしていくことで研究主題に近づくことができる。
- ④ 新たな教材開発を活発に行うようになった。
- ⑤ 指導者の適切な評価こそ生徒の判断力や表現力を高めるためには重要である。
- ⑥ 少人数授業の良さは生徒の言語活動の場が飛躍的に増えることである。

#### (2) デメリット

- ① 習熟度別少人数授業は、要因によっては、基礎クラスの生徒の学習意欲が上がらない。
- ② 言語活動の不十分さが感じられる。
- ③ 指導者の評価のバランスに慎重さが求められる。

#### 4 まとめと次年度の構想

2年間の研究期間が過ぎ生徒の変容はどうであるかといった場合、現時点で確実に学力が点数にして何ポイント上昇したというようなきわめて具体的な成果やデータはない。毎年入学してくる生徒の状況もそれぞれの年度によりさまざまな特徴をもっている。昨年度良い成果をあげた指導計画、指導方法を次の学年で試みても同様の成果が出なかった場合もある。

各教科から出されているメリット、デメリットを総合してみても、この2年間研究主題を追究することで、それぞれの場面、場面においては生徒の読解力・思考力・判断力・表現力はよく育ち、発揮されたと感じている教員がほとんどである。また基礎・基本の定着についても授業形態の特徴を生かした指導方法、しっかりとした指導計画、適切な評価とその改善への手だてを、じっくりと時間をかけて実行すれば確実に学力は向上すると誰もが感じ取った。手ごたえはあったのだが、研究主題の求める内容や関わる範囲が広く大きすぎてどの教科もまとめ方に戸惑っている状態ではないかと感じる。良い点としては、どの教科からも教科内での教師同士の連携が密になったことや、各個人の指導法のスキルアップがあげられている。新学習指導要領の改訂点に関してもよく研修し理解することができた。

研究の最終年度に向けての課題は生徒の変容や学力の状況を具体的なデータや目に見える成果の記録を提示することで評価し述べるようにすることである。